Bericht des Deutschen Hauses in Naruto

Ruhe（ルーエ　やすらぎ）

Februar 2021

43

The German House in Naruto

鳴門市ドイツ館館報　第43号
発行日　2021年２月1日
発　行　鳴門市
編　集　鳴門市ドイツ館
〒779-0225
鳴門市大麻町桧字東山田55-2
TEL：088-679-9110　FAX：088-689-0909
E-mail：doitukan@city.naruto.i-tokushima.jp

徳島♡ドイツ平和村支援の会主催「ドイツ国際平和村写真展」

2020 年 3 月 7 日から 31 日まで徳島♡ドイツ平和村支援の会主催による「ドイツ国際平和村写真展」を開催致しました。鳴門市ドイツ館内に事務局を置き、支援活動をスタートさせて 14 年目となる当会は、毎年コンサートや講演会などアイデアを凝らしたイベントを開催しています。これらのイベントで得た募金や収益金を毎年平和村へ送金する活動を継続してまいりました。しかし、今年は新型コロナウイルスの影響で 3 月に予定していたチャリティーコンサートはやむなく中止。今後の活動について悩んでいた矢先、平和村より巡回写真展のお話をいただきました。2017 年に設立 50 年を迎え、ドイツ各地で写真展を開催しているとのこと、大変嬉しい提案に心から快諾しました。

平和村から届いたパネルは全部で 44 枚。大きく 4 つに分かれ「設立・歴史」から始まり、活動の 3 つの柱である「子どもたちの医療援助」「現地プロジェクト」「平和活動」で構成され、わかりやすくキャプションも記載されていました。

開催期間中は実際に平和村でスタッフとして活動された OB や OG が駆けつけてくださり、当時の様子や体験談を聞くことができました。新聞やテレビなどのメディアにもたくさん取り上げていただき、それがきっかけとなり関心を持って下さった方も多く、今後の活動の大きな励みとなりました。

今なおこの瞬間にもどこかで罪なき幼い子どもたちが傷つき泣いている世界。澄んだ瞳をした子どもたちの笑顔に、より一層平和への思いが強くなります。私達支援の会にできることは微々たる事ですが、子どもたちのためにできる事を今後も継続してまいります。いつの日か、平和村が必要とされなくなる日が訪れますように。

（ドイツ館指定管理　川野）

ベートーヴェン生誕 250 周年記念企画展「ベートーヴェンと『板東俘虜収容所』のドイツ人捕虜」

1918 年 6 月 1 日、ベートーヴェン作曲の《交響曲第 9 番》が「板東俘虜収容所」において演奏されたことはよく知られています。2020 年ベートーヴェン生誕 250 周年を迎えたことから、主にベートーヴェンの生涯、また「板東俘虜収容所」におけるベートーヴェンの楽曲演奏やドイツ人捕虜たちのベートーヴェンの捉え方等を紹介する企画展を開催しました。2020 年、国の緊急事態宣言に伴い、新型コロナウイルスの感染防止対策に努めるため、ドイツ館は、4 月 18 日から 5 月 8 日を臨時休館としました。そのため展示期間を、本来の予定であった４月から６月を変更し、5 月 9 日から 8 月 31 日としました。

本企画展では、板東でベートーヴェンの楽曲がいかにして演奏されたのか、またそこに込められた様々なメッセージについて考える機会となりました。板東には「徳島オーケストラ（後に M.A.K. と改名）」、「エンゲル・オーケストラ」と「シュルツ吹奏楽団」という主に三つのオーケストラの活動がありました。板東では約 100 回のコンサートが開催されましたが、ベートーヴェンの楽曲は 17 公演（23 曲）と最も多く演奏されていました。それに続いて、ヨハン・シュトラウス２世、タイケと続き、ワーグナーの楽曲は９公演（13 曲）演奏されていました。それに加え、板東の記録からも、ベートーヴェンの楽曲はドイツ人捕虜たちにとって特別なものであったことが分かりました。さらに、2020 年に和歌山の南葵音楽文庫の調査研究において、新たな板東の直筆譜が見つかり、和歌山県立図書館より画像を提供いただきパネルによる展示をしました。そこから板東における演奏活動について推察することができました。

芸術により人を救いたいという願いを持ち、その想いに救われ、一生をかけ作曲活動を行ったベートーヴェンでしたが、その後、彼の楽曲は様々な評価を得ながら、多くの場で演奏されるようになりました。「板東俘虜収容所」では、管理側の配慮により、規則のなかで捕虜の自主的な活動が認められ、芸術文化活動が活発に行われました。音楽活動においては、ベートーヴェンの楽曲が最も多く演奏されましたが、それはドイツ人捕虜にとって、ドイツ文化の誇りでもあったようです。彼らはベートーヴェンを精神的な支柱として必要としていたのかもしれません。苦難のなかでも活動を活発に行う精神力、彼らの思いを汲みそれらを推奨した管理者側の思いやり、そして、芸術文化の重要性を窺い知ることができました。（長谷川）

ユネスコ「世界の記憶」登録推進事業 ベートーヴェン生誕 250 周年記念講演・企画展 「世紀末芸術と『板東俘虜収容所関係資料』の美術史的側面」

2020 年 11 月 6 日～ 12 月 27 日にかけて、企画展「世紀末芸術と『板東俘虜収容所関係資料』の美術史的側面」を開催しました。2020 年 11 月にドイツ館で予定をしていた美術史家、美術評論家である高階秀爾先生（大原美術館館長、東京大学名誉教授）の講演は、新型コロナウイルス感染防止対策のため、講演を映像化し、企画展内での上映と講演内容を纏めた冊子の配布へと変更しました。

本講演では、世紀末芸術と戦争という垣根を越え、今日まで伝え残されてきた、ユネスコ「世界の記憶」に申請予定の「板東俘虜収容所関係資料」印刷物の美術史的側面と、2020 年ベートーヴェン生誕 250 周年に合わせ、ベートーヴェンと板東の資料の関わりについて、高階先生にお話しいただきました。また、「板東俘虜収容所関係資料」の主にプログラムのグラフィックデザインが、西洋美術史上どのように位置付けられ、大きな歴史の中での変換点であった世紀末と、板東の資料から見る西洋文明の近代化の流れを問い、検証するものでした。さらに、当時の西洋の新しい工業文明、社会の変貌や新しい芸術運動、それらの国際

徳島オーケストラ 第18 回コンサート（第2回シンフォニー・コンサート ベートーヴェン交響曲第九番）、1918 年　鳴門市ドイツ館

的な広がり等が一つとなって「板東俘虜収容所」のなかに入り、その最も象徴的な姿として、ベートーヴェンの姿があったことをお話くださいました。

板東の印刷物には、クリンガーの彫像を、モデルにデザインされた「第九」交響曲のプログラムにみるように、ウィーン世紀末芸術の影響がありました。 ウィーン世紀末芸術にはジャポニズムの影響がみられました。グスタフ・クリムトの《成樹》の背景に描かれた生命の樹は、日本の唐草模様に通じるところがあり、この文様も板東のグラフィックデザインに用いられています。その他にも、日本の影響を明らかに受けたデザインも見られ、和洋音楽大会のプログラムに例を見る浮世絵のような日本の特徴とされる左右非対称の構図等が一例として挙げられます。戦時下の捕虜収容所において、敵対する国同士の芸術文化の交流の軌跡が見られたことは興味深いものです。

本企画展中には、入場者に「フロイデくんマスク」の配布が行われました。

現在、高階先生の講演動画は、鳴門市公式 youtube チャンネルで配信しています。ぜひご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=v9D67IcgIUA&feature=youtube.be

（長谷川）

企画展示 「百年前のパンデミックとドイツ兵捕虜 ― スペイン風邪と板東俘虜収容所 ―」

今年度のドイツ館史料研究会の行う企画展示は、百年前にドイツ兵捕虜が経験したパンデミック、いわゆるスペイン風邪についてで、１月９日から２月末日までの開催予定となっています。企画のきっかけは現在の新型コロナ感染症（COVID-19）によるパンデミックではあるのですが、両者の比較をしようというのではなく、板東の捕虜たちがこの疫病に対してどのような防御の対策と感染の爆発的拡大にどのように対処し、患者をどのように看護・世話をしたかについて取上げました。

「スペイン風邪」は当時の人たちにとって未経験のイン

フルエンザで感染力も強く、発展しつつあった交通網と世界大戦による兵士の大量移動もあいまって、またたく間に全世界で大流行を引き起しました。欧米で流行した「スペイン風邪」はやがて日本にも上陸、各地に流行を広げていきます。徳島県では 1918 年 10 月末には大流行となり、収容所でも 11 月 8 日ごろには最初の患者が発生します。今回、これらの状況についても展示し、特に青壮年層で死亡率の高いことも触れました。

この疫病への対応は本来ならば収容所診療所がなすべき事柄なのですが、非常に困ったことに軍医をふくむ収容所医療スタッフが全員収容所内の流行が始まるとともにスペイン風邪に感染し、収容所に出てこなくなったのです。そこで日本側に代り中心となって活躍したのが板東収容所の健康保険組合でした。この健康保険組合そのものは板東に来てすぐに設立されたもので、病気の捕虜への援助や日常の軽い怪我や病気に対して薬を提供するなどの活動を通して収容所当局から信頼を受けていました。

健康保険組合は収容所での流行が始まる前から仲間に対して注意を促すとともに、うがい薬の提供をしています。流行が始まって患者が急激に増えていくと、診療所に収容しきれなくなりますが、音楽会や講義などを行う第 1 兵舎の講堂とビリヤード場に病室を設ける手配をしたり、看護人や世話人の募集を仲間に対して行うなど積極的な活動を行いました。軍医が不在なため重症者に対する適切な診断と治療ができなかったときには松江豊寿収容所長に掛けあい、隣町から町医者を呼寄せてもらっています。

うがいだけが身を守る

このような活動にも関わらず、最終的に板東では全体の 2/3 にあたる 678 人が感染し、残念ながら 3 人がインフルエンザで併発した肺炎により死亡しました。しかし看病にとどまらず、病人食や滋養物の供給などで仲間に心理的な安寧を与えたことは確かでしょう。（川上）

国際交流員のドイツ館での一年間

ドイツ館新規国際交流員として着任して間もなく、世の中が新型コロナウイルスですさまじい影響を受けました。国際交流員の仕事もその影響を受け、仕事の内容が変わってきました。

まずは来客対応です。リューネブルク市親善使節団の鳴門訪問や恒例の第九演奏会も参加者数の規模などの問題で延期となりました。それによって、ドイツ人国際交流員の通訳の仕事が最低限で行われました。その結果、通訳の仕事は小人数で行われたドイツ連保共和国イーナ・レーペル大使の訪問（7 月 14 日）、同大使館マルティン・ポール参事官（11 月 11 日）及び同大使館カーステン･キーゼヴェッター武官兼大佐の訪問（11 月 17 日）に限りました。

そのゆえ得た時間は様々な翻訳作業に注ぎました。鳴門市ドイツ館所蔵資料図録（2020 年 8 月発行）や、ユネスコ「世界の記憶」登録推進講演会の冊子などにおける独訳があげられます。

また、ドイツ館に保管されている、まだ和訳やドイツ語現代訳がされていない資料の翻訳にも励みました。その中では新しく入手したコンサートプログラムや手紙などがあり、また、青島での戦いに参戦した捕虜が残した、当時の出来事を描く日記があげられます。

その資料の多くは 100 年以上前にドイツ人が使っていた筆記体であるジュッターリーン体で書かれています。第二次世界大戦後から廃止となったこの書体は鳴門市ドイツ館に勤務する国際交流員が早めに読めるようになるべきだといっても過言ではないでしょう。

また、国際交流員が積極的に取り組むべきことにも触れたいと思います。板東俘虜収容所の史実がドイツにおいても、日本においてもさほど知られてない点が、鳴門市ドイツ人国際交流員にとって最大に改善できるところではないかと思います。独英和の三か国語でよく使われている SNS を通じて、板東俘虜収容所の歴史や鳴門市で行われている日独交流の認知度をあげるよう、情報発信を行うべきだと思います。

現在は鳴門市中国人国際交流員と協力して、鳴門市内で行われるイベントや徳島県の文化・歴史などに触れる見学などをいくつかの SNS で紹介しています。日独中で書かれている長編ブログと、短編記事で情報発信を行う英語ブログがあります。国際交流員の目で見た鳴門市・徳島県のイベントなどをぜひご覧ください！

日本語ブログ：https://ameblo.jp/narutocity-cir-blog/
中独ブログ：https://narutocityblog.wordpress.com/
英語ブログ：https://www.facebook.com/Explore-Naruto-100689608600532
https://twitter.com/ExploreNaruto
https://www.instagram.com/explore_naruto/

（シュトライヒ）

新資料紹介

1. アルベルト・ヴェルナー関連資料の寄贈について

2020 年に板東俘虜収容所の元捕虜アルベルト・ヴェルナー（Albert Werner）関連の資料 2 点が相次いで寄贈されました（写真 A）。

写真 A

1 点は、ヴェルナーが東京高等歯科医学校の教員岡田平八郎と共同で執筆し、昭和 10 年 12 月に出版した『歯科医語辞典 独・羅・和』 1 冊で、もう 1 点は、頭頂部に角状の装飾を施した革製のヘルメットである「ピッケルハウベ（Pickelhaube）」です。

まず、アルベルト・ヴェルナーについて、青島・ドイツ兵俘虜研究会の小阪清行さんがまとめられた記事を参考に紹介します。

ヴェルナーは 1892 年 4 月 18 日にザクセン州メルゼブルク県のヴァイセンフェルスに生まれます。家具職人としてマイスターを目指し諸国を遍歴し、1914 年 8 月 1 日に召集され海軍第 3 大隊工兵中隊に 2 等工兵で配属となり、青島で日独戦争を戦いました。終戦後は松山、板東の俘虜収容所に収容されます。短い期間で日本語を取得したことにより所内では通訳として活動し、解放後も日本に残ります。1918 年 8 月に板東俘虜収容所で発行された『板東俘虜収容所案内』によると、日本側が設置した病院棟で、月曜と木曜の日本人歯科医の診察に通訳として勤めていました。また、第一次世界大戦終結から解放されるまでの間、病院棟の一室にヨハネス・バートと暮らしています。

捕虜から解放される一ヶ月前の 1919 年 11 月 14 日には、月俸 250 円（約 90 万円）という稀に見る対応で大阪市の内外信託商事株式会社と雇用契約を結んでいます。その後、日本人女性と結婚し東京へ移り、1925 年に東京丸の内ビルに貿易事務所（Mercator Trading Co. Tokyo）を構え、中南米など多くの国に歯科医療機器を輸出しました。また東京大学医学部の教授陣に翻訳や通訳を提供します。1942 年に帰化を果たし、植田祐弘と改名し 1984 年 7 月 5 日に亡くなるまで日本で暮らしました。

『歯科医語辞典 独・羅・和』は、孫の植田昌吾さんからご寄贈いただいたものです。この辞典は、歯科に関するドイツ語・ラテン語・英語・フランス語などの用語をアルファベット順に和訳したもので、縦 14㎝、横 8㎝、388 ページの小型本です。序文にはヴェルナーは、雑誌『日本之歯界』の独文欄を担当しており、歯科学に関してはかなり精通した人物であったと記されています。

一方、「ピッケルハウベ」は孫の多賀正典さんよりご寄贈いただきました。プロイセン王国時代から第一次世界大戦初期に採用された角付きヘルメットで、帽体は革製です。本品は正面に金属製のバイエルンの紋章と、その下に「In Treue Fest（揺るがぬ忠誠）」と書かれた帯がプレスされたプレートが装着されています。

ピッケルハウベは、第一次世界大戦の初期まで使用されますが、金属製のヘルメットと比べ、銃などの攻撃から頭部を守る機能が劣ることなどから、戦場では使われなくなります。青島における日独戦争でも残された写真の中で、ピッケルハウベを被った兵士の姿が確認されないことから、この戦場では使用されていなかった可能性が高いと考えられます。召集された時点での支給品とも考えることができますが、どのような経緯でヴェルナー氏が取得し長年所持していたかは不明です。

写真 B は、ヴェルナー氏が収容されていた松山とは別の丸亀俘虜収容所における捕虜の演劇の様子を写したものです。画面右側の軍服姿で立つ捕虜の一人が布製カバーを装着したピッケルハウベをかぶり、役を演じている様子が写されています。このように収容期間中には演劇の小道具として使われていたかもしれません。

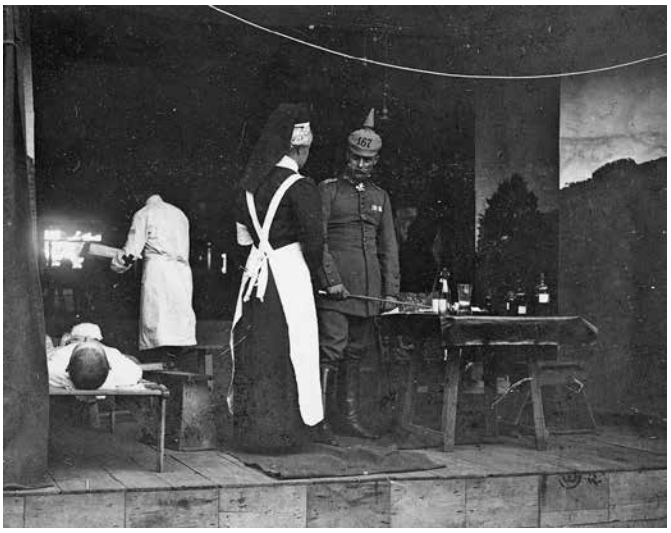


写真 B

ヴェルナー氏が亡くなるまで日本で暮らしていたことは全く知られておらず、今回、孫である渡邊則子さんが小阪清行さんに連絡されたことがきっかけとなり判明しまし

た。また、努力を重ね短期間で日本語と歯科学の知識を身に着けたことで日本の歯学会の発展の陰に、ドイツ兵捕虜が携わっていたことを知ることができました。さらに、親族のみなさんが大切に保管していた祖父ヴェルナー氏の思い出の品がドイツ館へ寄贈されることとなりました。

2. ゲオルグ・モンターク関連資料の寄贈について

ドイツ連邦共和国 バンベルクのアンネ・シュテングラインさんからは、久留米俘虜収容所のルドルフ・ラウテンベルク（Rudolf Rautenberg）から、シュテングラインさんの祖父ゲオルグ・モンターク（Georg Montag）に送った 1918 年の聖霊降臨祭を祝った日本製絵はがきをご寄贈いただきました。

3. 購入資料について

板東俘虜収容所美術工芸展（俘虜製作品展覧会）および体操選手権の入賞者に授与された賞状 2 点と、絵はがき 4 点、コンサートプログラム 1 点を購入しました（写真 C）。賞状の 1 点を除き、今までドイツ館が所蔵していなかった図柄のものです。

写真 C

収容所内で行われた体育競技会の賞状は 1919 年 6 月 1 日に開催されたシニアクラスの 12 種競技で 2 位に入賞したカール・エーラス第 3 海兵大隊第 2 中隊・軍曹に授与されたものです。1918 年 3 月に開催された板東俘虜収容所美術工芸展（俘虜製作品展覧会）の賞状は、食品部門の展示で 2 位となった将校用精肉店に授与されたものです。

絵はがきは、俘虜収容所美術工芸展の記念絵はがきが 1 点、1918 年の聖霊降臨祭の絵はがきが 2 点、荷物を受け取った捕虜の姿が描かれた受領証明絵はがきが 1 点です。

コンサートプログラムは、「ワーグナーの夕べ」と銘打たれた M.A.K. 第 29 回コンサートのプログラムで、1919 年 4 月 20 日に開催されています。演奏された曲は、1. ローエングリンから第 1 幕・第 3 幕前奏曲、2. マイスタージンガー 前奏曲、3. パルジファル から 聖金曜日の魔法、4. 神々の黄昏 から ジークフリートへの追悼、5. さまよえるオランダ人 序曲の 5 曲です。

これらの資料は、令和 3 年 4 月 2 日から 4 月 25 日まで、ドイツ館 2 階の交流コーナーで展示します。　（森）

ドイツ館所蔵史料紹介
クロップ旧蔵アルバム

これまでこの館報で鳴門市ドイツ館所蔵資料についてその主要なものを紹介してきましたが、それらはすべて板東俘虜収容所あるいはそれ以前の徳島・丸亀・松山収容所に関連するものでした。それはとりもなおさず、当館の所蔵する資料については、それらの収容所に関連するものがほとんどを占めることを示しています。しかし少数ながら、それ以外の収容所に関係するものも所蔵していまして、ここに紹介するクロップのアルバムもその一つです。

クロップ（Johann D. Klopp）は最初大分その後習志野に収容されていた捕虜です。大分俘虜収容所はドイツ兵捕虜の日本への移送後、当初設けられていた 12 ヵ所の収容所の一つで、収容人数は 141 名（後に 215 名）、静岡に次いで少ない数でした。ここで彼らは 1914 年 12 月から 1918 年 8 月初めまでおよそ 3 年半以上を過ごし、その後習志野収容所に移りました。このクロップの娘であるルイーゼ・ヴァルネッケ＝ハルトゥングさんおよびエンネ・ヘセさんから 2003 年 6 月のドイツ・ブラウンシュヴァイクで開催された鳴門の「《第九》里帰り公演」の際に彼の捕虜時代の写真アルバムが鳴門市に寄贈されたのです。

アルバムそのものに収められている写真は全部で 117 枚ですが、別の 1 枚の台紙に 6 枚が貼られているのとばらで 34 枚、合計 157 枚の写真があります。保存状態に関しては、写真が黄ばむと共に画像が不鮮明になっているものが 10 枚程度ありますが、全体的には良好です。撮影地については、大まかに言って大分、習志野、中国の 3 ヵ所となります。一番枚数の多いのが大分（とその周辺）で 105 枚、次いで中国が 27 枚、習志野 18 枚、その他 7 枚です。

このアルバムには有難いことにほとんどのページに写真への説明が書かれているほか、個々の写真の裏に書込みのあるものがあり、具体的な撮影場所と時期、人物の名前など判明するものが少なくありません。ふだんの生活の様子はもちろん、演劇やスポーツなどの活動の一端も垣間見えます。中には海水浴をしている写真もあって、裏面に 1916 年 6 月と書かれていますから、板東の人たちが近くの川で水浴をする前年、海水浴だと 3 年前のことになります。何よりも目を引くのは、収容所が置かれていた小学校（校舎 3 棟のうち 1 棟が収容居室となっていた）で行われ

た大正天皇御大典の式典の際（1915 年 11 月）に生徒父兄の前で体操演技を披露していること、さらに 1 年半後の 1917 年 5 月の聖霊降臨祭のときのドイツ兵の体操祭でも生徒父兄の前で集団演技を披露している様子が写真におさめられていることです。大分でも地元民との交流が早くからあったらしいことがわかります。驚いたことに、1916 年夏に海岸で撮られた写真には、捕虜のほか地元民も写っていて、足下にビール瓶が何本も転がっているのです。地元民が捕虜相手に商売していたかに見えるのですが、どうなんでしょうか。いずれにしろ、大分も捕虜に対して板東と同じように、あまり厳しくなかったのかもしれません。

（川上）

1917 年 5 月 27 日　体 操 祭

板東ドイツ人捕虜の運動・ファウストバルについて

板東俘虜収容所の捕虜生活の中、運動は精神や身体の健康状態を保つための不可欠なものでした。収容所新聞から窺えるように、サッカーやシュラークバルが最大の人気を博していましたが、体操、テニスやボクシングなど、板東俘虜収容所では松江所長の仲介で開所間もなく多様なスポーツ活動が広がっていきました。

しかし､ほとんどの競技運動は運動場を必要としました。その他にラケットやボールなど、器具を要した競技も少なくありませんでした。いくつかのテニス場やサッカー場などが収容所外に存在したことは捕虜たちが残した地図で確認できます。ただし、収容所内でも可能であったスポーツがありました｡そのスポーツの一つはファウストバルです。

ファウストバルの「ファウスト」はドイツ語で「拳」を意味します。最古スポーツの一つで、バレーボールの原型と考えられていますが、本格的な競技として発展していったのは 19 世紀末のドイツです｡古典学者や体操教師であったゲオルグ・ヴェバー（Georg Webber）により導入され、第一次世界大戦勃発までは幾度もルールが変わってきましたが、体操に励む人々やドイツの体育の一環として楽しまれました。

捕虜生活を写した写真の中で、組体操をする捕虜達の姿がよく見られます。ドイツで盛んであった体育運動の浸透度や収容所の資料からすると、板東俘虜収容所にいたドイツ人が同じくファウストバルを身近な運動として楽しんだことは想像に難しくありません。1917 年 10 月に開催されたスポーツウィークに競技種目の一つであった他に、ファウストバル協会や専用運動場まで存在したことから本格的や娯楽的に行われた様子が窺えるでしょう。

ファウストバルはスポーツとして、現在でもヨーロッパを中心に行われています。捕虜たちが板東で運動を通じて限られた空間で精神や身体の健康状態を保とうとしたように、我々も彼らに習って、新型コロナウイルスの影響で余儀なくされた新しい生活様式において、精神と身体が健康でいられるように工夫せねばならないのではないでしょうか。

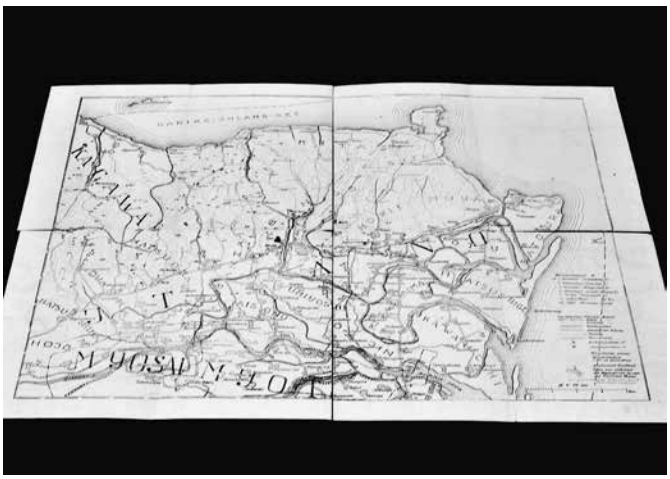
（シュトライヒ）

板東俘虜収容所内でファウストバルに興じる捕虜

炭焼き魔女の谷

1919（大正 8）年 3 月 2 日発刊の『板東俘虜収容所日刊電報通信』（Täglicher Telegramm-Dienst Bando）に 4 枚一組の収容所周辺の地図である「徳島板野郡周辺地図」（以下、「周辺地図」）が仕上がり、一部 25 銭、クロスの裏打ち版は 70 銭で販売することが通知されます。しかし 4 枚の内 1 枚が日本側の検閲にかかり､作り直すことになったことも同時に告げられます。3 枚の地図はその日から販売され、三日後の 3 月 5 日には修正された地図が完成し購入者は受取ることができています（写真 A)。

「周辺地図」は当時の板野郡東部地域を、収容所をほぼ中心に置き縮尺 4 万分の 1 で描いた地図です。当時、鳴門海峡を含む板野郡最東部は由良要塞として陸軍の管理する区域にあたり、特に鳴門海峡付近の写真撮影や写生・測量が禁じられていました。ドイツ館に残る「周辺地図」には大毛島と島田島が描かれていないことから、この 1 枚が



写真A

検閲を受け作り直されたと推測できます。「周辺地図」は日本の既製地図を参考とし作成されたと思われますが、谷筋や河川の幅・方向、等高線による山の形状が実際とは異なるほか、東西方向がやや圧縮されて表現されています。河川と海域は水色、等高線は明褐色の線で記し、ローマ字表記の地名・標高・境界・道・鉄道は黒色と、数色を使った謄写版印刷で仕上げています。この「周辺地図」の最大の特徴は、収容所の北側の山中のいたる所に赤色で記されたドイツ語が散在していることです。そこには、"Affenberg"（猿山＝大麻山）、"Nixental"（水の精の谷）、"Holzhacker Berge"（木こり山）、"Rembrandt Scharte"（レンブランドの切り通し）など、実際にはない名称が書かれています。これらはドイツ兵捕虜たちが命名した「地名」です。これらの地名が記された付近には、黒色で一列の破線が谷や山の稜線に描かれますが、これらの線はドイツ兵捕虜たちの遠足ルートを示したものだと考えられます。例えば、"Köhlerhexental"（炭焼き魔女の谷[1]）と記された一筋の谷川が大麻山の北東にあります。この谷は 1919 年 1 月 21 日の第 1 回終日遠足で実際に歩いたことが、『ディ・バラッケ』の 1919 年 1 月の収容所日誌に書き残されています。日誌の記述から、収容所 – 炭焼き魔女 – 折野谷 – 瀬戸内海 – 櫛木 – 星越峠 – 大麻谷 – 収容所と、今の北灘・大麻町を周遊したことが分かります。後に提示された統計には、この遠足で歩いた距離は 32km で、将校 9 名、兵卒 224 名の合計 233 名が参加したことが記録されています[2]。

「周辺地図」には、この時の遠足のコースに沿った山中のルートが黒色の破線で描かれています。そのルートは「炭焼き魔女の谷」の上流近くまで谷に沿い、そこから北西側の尾根に上がるため斜面を登っています。その途中には "Köhlerhexe"（炭焼き魔女）と記された場所があり、さらに上の尾根に向かう斜面には "Schurre"（滑り道）と記された急な斜面であろう場所を通過しています。その後、標高約 360 mの山を越え、眼下に瀬戸内海のパノラマを見ながら北灘町折野の鬼骨寺付近の谷筋に到着しています。一行はここから北灘の海岸線を東進し、櫛木海岸を目指したとみられます。（図 1）

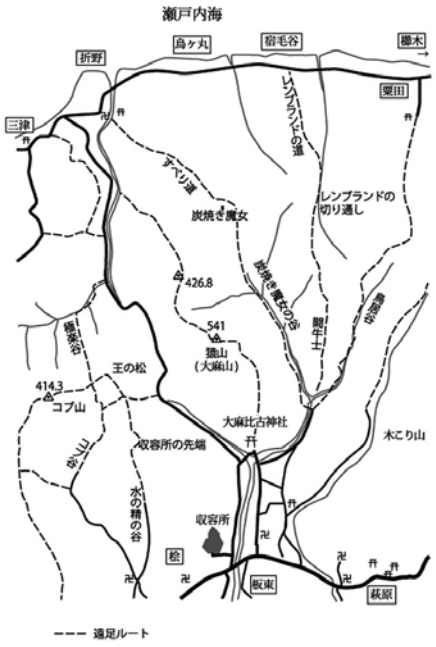


図1

この遠足ルートについて、陸地測量部が明治 29 年に測量した 2 万分の 1 地形図と比べてみると、収容所から「炭焼き魔女」と記された小屋の下にあたる谷筋までは、「周辺地図」と同じ板東谷川に沿った歩道が描かれています。しかし、この地形図では遠足のルートとは違い北東側の斜面を登り抜け、北灘町鳥ケ丸と宿毛谷へと通じる 2 本が描かれているのみです。そこには折野方面に続く道は描かれておらず、現行の国土地理院の地形図にも記されていません。

氏橋武敏さんの著書『板東の山やま』によると、「炭焼き魔女の谷」と記された谷は地元では「板ヶ谷」と呼ばれ、数軒の民家で暮らす住民が山を開墾し小さな田畑をつくり、山仕事にも従事していたと記されています（写真 B）。

写真B

また、この谷の西斜面で大麻山の北側にあたる「後谷」には、大昔から柑橘系の食酢「すだち」が自生する場所であったと紹介されています。この辺りは松の良材が育つことから、松の板材や松葉、柴を運び出す仕事道が多く開拓されていたと思われます。このように山で働く人たちをこの地域では「やまど」と呼びました。

第 1 回目の終日遠足を計画したドイツ兵捕虜たちは、事前に情報を収集し遠足ルートを作成したと思われますが、その際、「やまど」たちが開拓した仕事道も取り入れ、見どころ・歩きどころを盛り込んだルートに仕上げ、参加者を楽しませようと工夫したであろうことが想像できます。

この終日遠足は 1919 年 6 月までは、山間部を横断あるいは縦走するルートで行われますが、7 月から 10 月にか

けては北灘町の漁村である櫛木のみを目的地とした遠足へと変わっていきました。

注）

1.「炭焼き魔女の谷」に並行する道は、大正 13 年度に林道西谷線が設置された。

2. 鳴門市ドイツ館史料研究会「板東俘虜収容所で実施された散歩と終日遠足に関する半年間の統計 1919 年 1 月～6 月（ディ・バラッケ 1919 年 6 月号）」『ディ・バラッケ 1919 年 4 月～ 9 月・帰国航』

参考文献

氏橋武敏 1996『板東の山やま』㈱教育出版センター

（森）

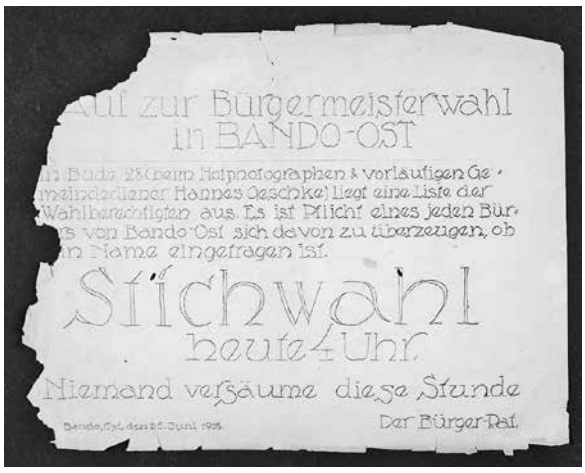
鳴門市ドイツ館所蔵資料保存に関する調査研究

鳴門市ドイツ館所蔵の収容所開設当時の資料の中で、最も多くの割合を占めるものは印刷物です。しかし、大正期の紙資料（近現代紙資料）は、主たる保存の対象とみられず、保存に関しても重きを置かれることが少なかったことから事例や研究も少ないのが事実です。この現状のなか、鳴門市ドイツ館所蔵の大正期の資料である所内印刷物には、一般的に酸性紙と称されるものが多く含まれており、年月を経ると変色し脆くなる性質を持っています。多くの紙資料は色の変色がみられ、中には、紙自身の物理的強度の低下から、力の加わる隅や端の部分で崩れて既に欠失した箇所がある資料も幾つかみられます。また、この酸性紙と合わせ、用いられている石版印刷や謄写版印刷のインクなどの劣化挙動についても現在のところ研究や事例報告等が少なく、保存や修復等についても未知の部分が多くみられます。そのため、こうした資料の素材を調査し劣化の状態を見極め、今後の保存方法や必要となる処置の手法を検討する必要があります。ドイツ館では、歴史的文化的価値のある資料を未永く残していくための事業を行っています。

これは以前、文化財保存修復学会で発表した内容となりますが、予備調査では、目視により異なる紙質の資料、主に板東俘虜収容所新聞『ディ・バラッケ』等の冊子類に用いられたざらつきのある紙、プログラムに用いられた厚手の紙、チラシ、地図、講演会資料等に用いられた特に劣化の著しい紙、絵葉書等に用いられた厚手の紙を分類しました。更に、紙質を目視により分類し、それぞれに属する資料の中で、脱落片のあるもの 13 点について、繊維組成試験（光学）日本工業規格 JIS P8120 紙、板紙及びパルプの繊維組成試験方法に基づき、繊維分析を実施しました。

その結果として、これらの資料は針葉樹機械パルプ、もしくは針葉樹化学パルプを主体とし、そこに綿繊維、また稲科やわらの植物の繊維が含まれる資料が混在していました。また、主に講演会資料等は、針葉樹機械パルプが主体となっており、これらの資料は、劣化しやすく、全体的に脆いことが解りました。資料の分析調査について、解決すべき課題は多くありますが、今後も調査を進め、保存や処置方法について引き続き、検討していきたいと考えています。

（長谷川）



チラシ「さあ、板東東地区村長選挙へ。投票は本日４時。」

板東俘虜収容所新聞「ディ・バラッケ」独語新装版、鳴門市ドイツ館所蔵資料図録「板東俘虜収容所関係資料」イラスト・スケッチ編の刊行

板東俘虜収容所内にあった二つの印刷所から発行された絵はがきのイラストや、画集のスケッチをまとめた図録が刊行されました。また、ドイツ館史料研究会監修により、板東俘虜収容所で捕虜が発行した新聞『ディ・バラッケ』独語新装版が刊行されました。現在、ドイツ館で販売しています。お問い合わせはドイツ館（088-689-0099）まで。

今後の予定

2021 年 2 月 28 日まで、「百年前のパンデミックとドイツ兵捕虜－スペイン風邪と板東俘虜収容所－」、4 月 27 日から 6 月 27 日まで、パウル・エンゲル生誕 140 周年を記念する企画展を開催します。